



昭和十六年一月十一日
尼野貴英氏贈
寄

押照

やまと

大はよ。まちあら。いつまか舟の
橋つよ。りよ。高岸のよよいよ。よ。
ほりの水た。さよる。さよるのうを。とき
あ。さよ。おゆ。おゆ。おゆ。おゆ。おゆ。
とくね手に。おゆ。おゆ。おゆ。おゆ。おゆ。
称へます。も樂に。もす。もす。もす。
を。おゆ。おゆ。おゆ。おゆ。おゆ。おゆ。
まと人其。は江の。よ。ひよ。ひよ。ひよ。ひよ。
おゆ。おゆ。おゆ。吉拜。吉。吉。吉。吉。

たまよせばあくし。ほの堤め
ねねうらしよとよもて、彦田の處
はくちよ示さんとすも。さうあ
てわ半せすし。にのふ、夜がもみじ
えし人、望ゆる。もんは士の、ねんぐのよ
ながれ。身をりそへ。狂草はの。さきま
をえてまめや。

嘉政十二年夏月教才義にきのやくよ

從四位下荒木田神主久老

かく秋人贊

僧契沖詠

丸

さくらみち角のひだよまね、誰もよみ
まよ集を考るよんれい不郷を石入園角
み里やいぬ所すむ其の所のひとも角ゆ
いぬれん園よ素をねびてあようわゆふ
時のすよ云石入のうち居のもの用あ
ううう御と姓えんよやへつわも角山お
いづるよあらねとあくまうれうとおまを
こをいづる古今集と名序ある有先師

柿本文史者も振神妙々思獨歩古今之間
やうけとよひて和音をまむふやまうんを
ひて先師とあふぬ人等されどもまきまことの
解をあれとあつけによくちよといそへとて
角すいときたむる指とそいゆるわ人の成
姫猿をあれも柿樹のらをよアヘア

夢見

紀行國の浦つゆまえわの浦乃もうらと貢ト捨川
きのくほの浦つりてそば者のせと名とかじ
すわづのうみもとをうわ國を捨てよみさ
るそよろき延喜の御付よ勅とうけつあノモ

古今倭奇集を捨てゆきも集を捨てと其
御のあはくくうちハ一きととも國を捨て
そみうれと捨て宣のきとひくよしくう
を捨じやくらんも古々集よ豊くち後を勤
してをうけのち次のとくとくとくと
りせのあはくくの後見ひくひもあやくわを
まくわとゆのそれうるをうるのあくまと
めうわとわくわ

船恆

さくひ義柄え方がさまよ其のを拂ひ

是れ即候うてにあくまでもある間、
一も内ゆたるやうの氣をもつて、
にえのまゝうとうやむれうにうにうわ
ちづくわとよもあきとまつて、ゆきわき
やくわおとく柄をきくうきう基人乃と
ち亦うほまくふとよもあまのうじと
やあてハ御内事事あるくしゆよしもてなむ

伊勢

わのいぢとゆでほくを芸其のとみよ教導し
あれそしづめようとのひげて待え年かす
きつゆく今すあへば思へと清らがねす

門とあるとがよてとあうちわうてか
ゆよきうちわととくとて其ののう
よみにくまとひ人の網内賀うるよ、挿し
ややめうや亦抜き集里うるよあく
えいれともあくと思ふくのうく
あくをねようそけうと清るをよそくあり

家翁

えのれうのちふぬけ出で今らきだあくと
右家翁とあはばうわ大はばとえ日はく神武
天皇东征のけうわゆのね乃はうらとくあ
らきうり亦おお城中ちうりけいがみ國の

まのと賦してよみを歎かず十七歳可
刃立ち城を腰にせねけ生てやまゆめ
皆有れ縁うわとのまのそとたかの及
かれてわが志のう詞辭よねけ生てかれ
まくあうといふ

赤人

若浦ようちきてきくはるのひとあらま
きと赤人よのつにたまくまくとを
すもあつとそーてんせわるよとよも
にむりげうそとひそまよくてもす
やいひととくのひとをよせよわゆ

鶴鳴九臯聲聞于天の音亦赤人の音
をのうにうちをこれよとよめきよの
じとをよとよめきよの

業年

えよも餘り身の内はだまきよも
おちひり朝の内乃外はもゆめうれ
えよくてもひのくわくことつて
くわくわくわくわくわくは年代もく
其音絃が傳まうことをうれきよ
かくらみくわくわ

遍照

女郎花をよくねぎらひぬのをまく
遍服侍をうながす、さよはせをみて
くじうにやとうとくじうといつまうそ
まわ遍服侍女郎花をまくうよえよ
めくをれりもくとみくとこれまよ
きとくまうれおむちまくつるとま
欲にふらまくのゆくわよむねうて行
きくほゆをとあきむくやあきひや合
ひて其うのさあへんくまくとまく
またをとよくなれをまくやまく
かくううわ

素性

たひくねどもくすのくわるの鶴角み
素性は仰も遍服を便の付みふうち遍服を
花との信頼と号をまきだふのむすねといぬ
さむ素性はやまと國の布宣を
よ下よ往てうむよてうやくくわらうて
さむ乃様よ甚汎たをたくて父よ良
きにとれやあくまう遍服をうのうの
さくえとくまうすあくまう乃も

友則

お前は又泊宿の稀なやうや本とほどのをと
おお明る雲と同く紀兵庫のわ雲の御
はて花のむじのとよも、稀乃君をよみ
まよ友明う雲あれかよとて花をせよ
いづれをおとよたてをよそとよそとよ
を浮かれて雲のゆわを西うか
えり、つるをあり

様れ

あわせゆきとて踏みしむちの跡をう
きえおくよ経年みてくまくまく様に
たゞあらうとまことに代わるれと今

あよかたつて其へにしつは其の筋の鹿
乃とゑぢるけやうよとてうけを
感慨をかうやせらうも

小町

物のよちつとものを脅すひつあひあま
とくこまちをいづるはりぬけに伝
うちあをきうちやうとてほくとすといづ
衣通紙のうへりうめのうすいとあ
きくくまよちうとひいて思ひのう乃
みのをやつけ小町うへこのまよくぬ
船を引くも小野、小町うふるわよ

さすも古今集よ小廻姫はまことあり
そのは茅よと清くろとさうばようせ
うそいと共へをとわ

兼輔

ふとゆのやまとにれちきのひなよりす
か兼浦わだのてく人の花あらあらやま
あひたあとゆりよだよもとくわくつま
よよよつけてふとゆよやまよまじま
らうわたよくかともやあらや

朝忠

おもあゆくのくひはかのまひととよ思ふ

先もおもよあよよめ終てくくいゆ
人をもかをもうくらまーとよみよは
うちひねたのをのゆ終て猶もあらを
も春のべのけくすとよみよへゆ
おもくいぬもあらよあくぬ歌ハ行を
サクシとよくとよくとよくとよくと
よくとよく

敦忠

いよてよ尋のまの風すやすむをえねえ
敦忠ねたいもの風あらのほよひよど
いははてようひよくとよもよも敦忠

延喜の宣承雅子内親王に心をうけてや
はひかわわからむとほせのまよまよが内親王
みちくわ経はるかにまのとけあ
らとよもやうりて聖神、うふひう乃
度よ風うすあれ月のまたようけてく
りて風よわらかをひろつかいじて
かみ秋をわめくや

萬葉

うやう月わきてうそあら月のねのほき
えびえがたくつるくめせゆま
うやうくわくわ月がとうりゆ

やうてまかしてよ月すありわらふうこく
しにかしてうやう月すわれ潔白や
ちあくやうえ接門にあたるときを
経てち磨け門よかつてくわ 月歎
却よもぎのをまとわよ月のねます
みよもぎまとまとをやうてよ
ううううう

公應

郭うらうらじ、およもぎのうらのぬと
お忠郎のうりやうてゆらうは郭
いゆひとまきのきわらはよやうめよ

よりて其部され今ひとよきすわへけり
致詞へすらあてきるやう

忠岑

さうのゆゑ今ひとよきすわへけり
ももまくみねうへよ春うつゝはよもやう
みすのゆうはくしゆめあんとよりて後
を人むちのゆうよきびてよふ上
かうやもよわ忠岑いよきにえど得
かうとよえうみねへよのあみに
うて忠岑のよのんをよせよふ上内
あれとわめくや

あまく女序

久のそはせのとのよきひく辰の桜
さきた女房の絃よくよ辰の桜
うやよくたけけてくよ女房のくの
うれを以てうれせよ以てうれの樂
其うきいよ辰の桜もよいくから
乃とよわ唐李高うけよお入夜琴
や絶やうよつけて桜風ようふとせば
乃あよ行つや

頼基

ひとよみをよめばうよわとよく行のよま
せば

右れ基朝のうへひやみあさとこあら
林うきつたはきまよひといふを
坐てそくわ所の竹の林ひどくよめを
あああう奇異うるをいつよわくとりて
うきふうういぢうとうおわくあるか
あら作をやあらや

般行

こうわまれ候のわあとかわくみたとみとまうま
右般り郎くくすむくのきあやじら
こうわまのうのほう風よよひわとよ
やく實平のほけよ多よのそわこと

あめをりて店のまへ酒を乞なまへるよ
其うめのうちが、さて店のまのねまへ
にきてきてまへい風つて酒をと行つまし
うえまて旅人の中へほりんまうわ
其財の心をいつやかもろめみきつま
うこのやうよいひまくわして其後當
立あゆめうておと集まし哉をきくもと
を貰ふよむわとくよやこくめられ酒あれ
人をこめでまくわあらんとくくわ角宿
おつてまよあらのをあめがけよまで唐
川とあらわくとくとあらまのそよ

かくもあけゑやえ解りうみじれ俗の
うゑをかうみてよひきくわ

うえ

ぬちや川やまのまとうは思ひせむやは
まくまく波又ねむわ川やまのほうさ
やくまく波あいとよちてせうらんとよあ
によちて其川はおまよあううてみや
よそよそとくまくまくとくまくまくとくまく
あれがまくわがまくわとくまくわとくまく
とくまくわとくまくわとくまくわとくまく

宗子

あひあひ人あひゑううはやきまちわ其とひ
お家子ねだうよゆうくふあうまくさくま
アキラムアキラムアキラムアキラム
あおねぢもとわい春くま、ほひひー、お
えひさわくとくとくある二三とくとく
そのいづれいづれいづれいづれいづれいづれ

信明

月唐紅葉あきあうすの風のめまみくまくま
え、信明おたのうすにむのくとくの月
乃月歌よ紅葉あうすあうすあうすの風と
うみを賀へるすまくれのめまみ

えぬしく其人ふうせにされどもとまきあれば
はづくよきものとわからぬて白居易も、
元微ミツさう詩文をみて仰わる詩は遺文
三十軸、軸スジ金玉聲龍門原上土埋骨不
埋名といふもあまは仰う事きの集を
見てよあうよいときよちのとうねを
さめられんまうまねども此のとわり
やうむ聖神ううこ甚多を用ひや

清正

天はれかけわのうの事つばうちては書きひらめ
是へ唐の殿とをわせて紀伊のものとめて

は亦殿とよさんととねうひてようあら
なまうりをかけわのうにわらうけのまう
やせにうづけくまとようりをひでかを
ひやとはれいをあの辻をいぬや唐ふうけ
うくまよまであらそ亦殿とまぎ
つまきて信てまほうちからつとよしを
あけねううへ紀伊の名所也

頌

あくひきを秋のと中あらと秋よ唐ひて月やう
りううわの厚ても月夜をうまうまくと
あう秋のと中歌わる同人詩まふ楊貴

始歸唐寧思李夫人去漢皇情と仇れ
けしる八月十日承うりわらおと原文
承
其人情を承る頃うまくやうに能まう名宿也
よのうて一月十日承のうとうもあすと承
を秀逸とほせさよ明承集よいわたり
うりげて其人や承漢の又よ傳ふるを
贊せらや

與風

ちゆかのねよひうた歌をうとのそいや數みどりへき
えもちきうせのうと誰をうもんよせん
ちゆか乃むしむのうと歌くよ承

すう、ううう歌のあまうよ老うるをうううう
うまうも其うやの歌をうねぬうぬうう
其人のうとそのねはうるとひて數みやう
アといふや亦歌性ううてにいだりのう
りやーうううううううううううううう
うううううううううううううううううう

與風

元輔

秋の乃葉をうつて暮やれく聲と津まよとみと
え痛えよ秋のあさきのうたをあやよも
うひうううううううううううううううう

て其の外のアキと秋のアキの如きとも
ぬ一のとくもアツツんとちあつたなも

是則

雪をうづくのはどのねりとる月の月はあよ
是則欲あらき有明の月とみるてよう
アラシとよあらき雪とよさう生え甚う
たのめりとる月の月のまよあつるよ
ひづくさうくさゆるわ

えま

山下とよ清めほのまどわくとあうてうかれ
えまの欽はよくわくとまうおとれ

雪ひにきくね雪とうむとくよももえ
と雪の袖うらうとうくうらんを取て
うみるの、わくへえーとくに其人方
のうくう代をつてひそーたとや

女在人た近 亦号小太君

ターキの木ちた橋名はおいて日の花をうけられ
たき、禁ずるに近けでいたとこえせうてそ
こともの花たれちくまつてと名よわづら
橋のいとよやまほたまや誰けた近
だらくねるわ

仲文

徳也と申すと仰り御のえ、秋のよれも月夜も
右仲文より御の月夜をとるに、
せのほくはまきの城と後うたつけて其
人乃々とあわやかによくらを妹のよ
れも自のよとつて、もととおけむらも
さあわやねとほたと集序ともれき
名の、秋のあわやきとうしてれいと
う所の向をうくる

能宣

万代としむら那むとじひはくのまく

トのよね度数年とうまわねだく
よちひそひうれて西代やへとよあわやを
千年の物を万代やとよひれねだく其
よちひそひくしてじうくだくとく
人のよゆくとじひはく

忠貞

ハづくのよかよよか部うとのわよかよか
忠貞とよづくよづくよづくよづく
よとれわよわよわよわよわよわよ
はきよきよきよきよきよきよきよ
事てよよよよよよよよよよよよ

うれしうれしうれしうれしうれしうれしうれ

けちわ

兼盛

今れを思ひやうやうやうやうやうやうやう
是れを思ひやうやうやうやうやうやうやう
はくを思ひやうやうやうやうやうやうやう
きくを思ひやうやうやうやうやうやうやう
よかくを思ひやうやうやうやうやうやう
よまくを思ひやうやうやうやうやうやう
うやうやうやうやうやうやうやうやう
うやうやうやうやうやうやうやうやう

中務

しゆのゆのあることを社田トモヒタをやひうす、かほが
右中務も伊おもとめめわいせす、もあよ
おきりある、あれのこすらもあひ中がトモヒタ
行いせのあるかとよみえ後撰集トモヒタを
ゆふ年トモヒタを、ありうれやうるうらめ
えらうれやうれ、うれうれめめうれうれ
いせのうらめのまとじして中はくまと
けくやうて、いそあよみうからくせすと
うれうれうれきけるうれやうれ、くせすと

倭欽の仕事の多くは筆記であることを質
へあらわす。

今欲仙の贊みつゝハ信契沖ノれを
御くわづるをあくまにともて隱士就
ひうむてあくたもをやくわんくえ。
うれとわゆきを是よにあくた
よまく我よかとあくすうじらく
かお契沖うつまわいてハゆきう
うれとゆくまこと仰身う坐の

子期より辭をへきたあふとして
まれたもあきを新乃て又か
徳ちよおくよとちん

下り毛氏

長流

寛政十二年申九月發行

